The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言 ： 前例に流されない学科長のお仕事
Author(s)	大橋, 一友
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2011, 17(1)
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56696
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

-巻頭言-

前例に流されない学科長のお仕事
What is a director?

今年の4月に保健学科長を拝命して、8カ月がたちました。看護学専攻出身の学科長は荻野先生以来4年ぶりです。学科長になってから、99%のストレスと1%の癒しの中で過ごしています。一方で、自分から見える様々な景色も変わってきました。この巻頭言では、学科長という立場になってから見えてきた保健学科と看護学専攻の実情と問題点を書かせていただきます。

学科長の仕事でまず重要なことは、皆様方からのご希望と苦情・不満の受付です。皆様もお気づきでしょうが、多くの保健学科の運営方針が理由も定かでない前例踏襲という形で決まっていました。皆様方から改善のご希望や苦情が持ち込まれてきましても、制度や規約が存在しないために、的確な判断が下せないことがあります。古い医療現場でも、前例を踏襲することで病院内の運営をスムーズにし、内部での混乱を出来るだけ発生させないようにする知恵がありました。ちょうど、このシステムに似た状態が保健学科にも温存されています。しかし、このシステムでの運営では、十分な情報公開がなされません。大阪大学は国立大学法人として巨額の税金で運営されています。今後、適切な情報公開ができなければ、国民からの信頼を得ることはできず、適切な情報公開あっての我々であることを肝に銘ずる必要があると思います。大阪大学医学部保健学科は平成5年の開学以来17年目を迎えています。ここでもう一度、初心に立ち返り、保健学科の教育・研究・社会貢献の活動を正確にかつ適時に、公開することが必要です。教育ではまず、学部・大学院入試の全ての受験生に公平な入学試験を提供し、我々が必要とする人材を適切に選抜する制度を作ることが喫緊の課題です。さらに学部教育では、社会のニーズに適応した医療人や社会人を教育する為のシステムを、時代の変化に即応して、常時、改善していく必要があります。そしてこれらの改善はただちに公開し、世間の評価を受ける必要があります。一方研究では、教員だけではなく、職員や大学院生が一体となって新しい看護学領域の研究を進めていく責任が我々にはあると思います。その発表の場としての、大阪大学看護学雑誌の重要性はますます増大していくと思います。そのためには、大阪大学看護学雑誌の学内誌としての位置づけから、一段上の学術雑誌としての発展型を考えていくことも必要です。さらに、社会貢献活動の発表の場としてこの雑誌を活用することや、大阪大学医学部付属病院との交流のツールとしても重要になってきます。

もちろん、昨今の厳しい経済状況や人員不足を十分に考慮しなければいけませんが、大阪大学看護学雑誌が大阪大学で看護学に関わっている方々の研究・実践活動を発表する場として今後、発展していくことを期待しています。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野　生命育成看護科学講座
大 橋 一 友